

叡尊教団の紀伊国における展開

松 尾 剛 次

はじめに

奈良西大寺叡尊をいわば祖師とする叡尊教団の紀伊国における展開については、上横手雅敬氏や『和歌山県史』の研究¹がある。そうした先学の研究により、北条重時流の守護・地頭と北条氏被官と叡尊教団とが連携して紀伊国に展開した点などが明らかにされた。

ただ先学の研究は比較的史料の多い利生護国寺を中心にざっと論じられたに過ぎない。本稿ではそれらの研究に学びつつも、先学の誤りをも正しつつ、叡尊教団の紀伊国での展開についてより詳しく具体的にみてみよう。

第1章 金剛寺・利生護国寺・妙楽寺

史料(1)²

紀伊国

金剛寺

トヨ

福林寺 大慈院

(合点)

西福寺 破壊跡残了

光明院

宝光寺

妙楽寺

大慈院
利生護国寺

新宮

岡輪寺

(合点)

観音寺

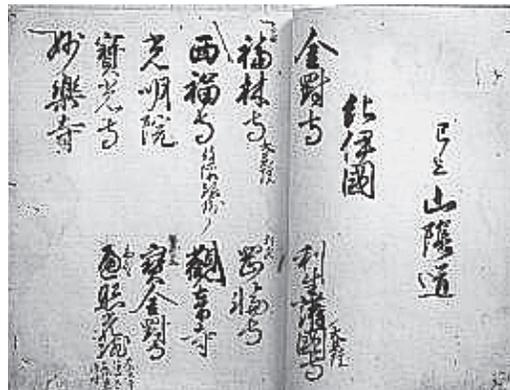
□□丈

宝金剛寺

高野

遍照光院 応永五年八月

廿五日十九代長老御時



叡尊教団の中世紀伊国における展開を考えるうえで、明徳2 (1391) 年に書き改められた西大寺末寺帳は大いに示唆にとむ (以下、「明徳末寺帳」と略す)。史料(1)は、その紀伊国の分である。それによれば、金剛寺など11箇寺が挙がっている。それらは、いずれも西大寺から直接に住持が任命される西大寺直末寺である³。この点は重要で、氏寺や直末寺の末寺⁴などは「明徳末寺帳」には記載されていない。

また、「明徳末寺帳」のその記載の順序は寺格を表している⁵ので先頭に記載された金剛寺こそは紀伊国を代表する叡尊教団の寺院であった。実際、後述するように、先頭と第2番目に記され

た金剛寺と利生護国寺は鎌倉幕府祈禱寺に指定されるほどである。

ところが、寛永10（1633）年の末寺帳には、利生護国寺と福林寺の2箇寺のみが挙げられている⁶に過ぎない。そこで、まず、「明德末寺帳」の記載順にみよう。

金剛寺について

史料(2)⁷

(文永)
同六年_己六十九歳

（中略）十月上旬、依備後入道妙蓮之請、紀伊国金剛宝寺字紀三井寺、講梵網十重、七日、名草郡神宮寺御領十九郷之内、禁断殺生、御読経所、神宮寺及散在諸堂三十余所堂内、飲酒乱舞、寺中酷酒酒宴停止状、捧之、十九日、八百九十四人授菩薩戒、十日、於日前神宮寺、国造授菩薩戒、

史料(2)は、叡尊の自伝である『金剛仏子叡尊感身学正記』（以下、「学正記」と略す）の文永6（1269）年条である。

それによれば、叡尊はその年の10月上旬に日前宮54代神主妙蓮（紀国造紀宣親、隠居して紀三井寺にいた）の招請で紀伊国金剛宝寺（通称紀三井寺、現和歌山市紀三井寺）に入り、『梵網経』の十重戒を講じた。それを受けて、妙蓮は名草郡の日前神宮寺御領19郷内の禁断殺生と御読経所、神宮寺および散在諸堂30余所の堂内での、飲酒乱舞、寺中酷酒酒宴停止の状を捧げた。19日には894人に菩薩戒を授け、10（20カ）日には日前神宮寺で妙蓮に菩薩戒を授けた⁸。この記事が「学正記」における紀伊国への叡尊自身による布教活動の最初の記事であるが、これ以前に下準備として、弟子たちによる布教活動が行われていたはずである。そうでなければ、894人にも及ぶ受戒希望者を集められたとは考えがたいからだ。

「明德末寺帳」の冒頭に記された金剛寺については従来、ほとんど触れていない。というのも、従来は、史料(1)に出てくる金剛宝寺（通称、紀三井寺）を8番目に記された宝金剛寺に比定している⁹からだ。しかし、宝金剛寺は「学正記」には全く見えない。金剛宝寺が宝金剛寺であった根拠はたんに名前の類似性だけである。

私は、金剛宝寺（通称、紀三井寺）の略称が金剛寺であった、つまり、金剛寺とは、叡尊自身が紀州布教の第1歩を踏み出した記念すべき寺、金剛宝寺のことであったと考える。

というのも、紀伊は大和に隣接し、叡尊が第8位の宝金剛寺を訪問して、他方、筆頭の金剛寺には訪問しないと考えるがたいからだ。また、叡尊教団の物故者名簿である「光明真言過去帳」でも宝金剛寺と金剛寺は区別されている¹⁰ので、宝金剛寺と金剛寺とは別寺と考える。

紀三井寺（以下、金剛寺）は、度々の兵火などにより残存する古文書は少ない。寺伝では宝亀1（770）年に建立され、唐僧為光上人が再興したという¹¹。すなわち、古代以来の有力寺院であった。注目されることには、金剛寺は、永仁6（1298）年4月に関東祈禱寺の一つに利生護国寺らとともに指定されている¹²。それほど寺格は高く、鎌倉幕府の保護を受けていた。

金剛寺は、永享8 (1436) 年の「西大寺坊々寄宿末寺帳」(以後、「永享末寺帳」と略す)にも、「東室二分」¹³として記載されており、15世紀においても西大寺末寺であった。先述のごとく江戸時代〈寛永10 (1633) 年〉の末寺帳¹⁴には見えない。

つぎに、金剛寺僧に注目しよう。

史料(3)¹⁵

○當寺第十三長老沙門信尊

(中略)

如性房 實勝寺 良瑜房● 金剛寺

○當寺第十四長老沙門堯基

「光明真言過去帳」に金剛寺僧で最初に出てくるのは良瑜房で、貞治5 (1366) 年9月20日に70歳で死去した¹⁶西大寺第13代長老信尊と、応安3 (1370) 年4月4日に75歳で死去した¹⁷西大寺第14代長老堯基との間に記されている。

もっとも、金剛寺は備後国西大寺直末寺で第3番目の寺格の今高野金剛寺もあるが、紀州の西大寺直末寺内で筆頭の寺院で、鎌倉幕府祈祷寺でもあった金剛寺が、「金剛寺」として「光明真言過去帳」には出ていると考えられる。

良瑜房は貞治5 (1366) 年9月20日から、応安3 (1370) 年4月4日までの間に亡くなったのだろう。

史料(4)¹⁸

當寺第十四長老沙門堯基

(中略)

覺日房 金剛寺 俊一房 桂宮院
智圓房 喜光寺 禪真房 寶満寺
聖戒房 如意輪寺 性真房 神宮護国寺

(中略)

良善房 當寺住 智照房● 當寺住

○ 當寺第十五長老沙門興泉

良瑜房の次に「光明真言過去帳」に出てくるのは史料(4)のように覺日房で、応安3 (1370) 年4月4日に75歳で死去した¹⁹西大寺第14代長老堯基と康暦1 (1379) 年6月晦日に86歳で死去した²⁰西大寺第15代長老興泉との間に出てくる。その間に死去したのだろう。

史料(5)²¹

○當寺第十八長老沙門深泉

素寂房	莊嚴浄土寺	戒行房	浄土寺
尊如房	利生護国寺	本如房	金剛寺

(中略)

○當寺第十九長老沙門良耀

その次に出てくるのは、史料(5)のように本如房で、応永2（1395）年9月25日に死去した²²西大寺第18代長老深泉と応永11（1404）年2月25日に死去した²³西大寺第19代長老良耀との間に記されている。その間に死去したのだろう。

史料(6)²⁴

○當寺第十九長老沙門良耀

(中略)

浄空房	金剛寺	光智房	越中弘正寺
-----	-----	-----	-------

(中略)

○當寺第二十長老沙門高湛

その次に出てくるのは浄空房は、応永11（1404）年2月25日に死去した²⁵西大寺第19代長老良耀と応永15（1408）年9月25日に86歳で死去した²⁶西大寺第20代長老高湛との間に記されている。その間に死去したのだろう。

史料(7)²⁷

○當寺第三十六長老沙門玄海

明秀房	當寺住	洞運房	當寺住
明瑜房	當寺住	洞意房	金剛寺住

(中略)

○當寺第三十七長老沙門高實

金剛寺の僧で「光明真言過去帳」の最後に見えるのは史料(7)のように洞意房である。洞意房は、永正15（1518）年7月8日に71歳で死去した²⁸西大寺第36代長老玄海と、享祿5（1532）年1月17日に74歳で死去した²⁹西大寺第37代長老高實との間に記載されている。洞意房は、その間に亡くなったのであろう。とすれば、16世紀の前半までは金剛寺は西大寺直末寺であったと考えられる。

利生護国寺・妙楽寺について

隅田利生護国寺は、現、橋本市隅田町下兵庫に所在する。行基菩薩建立の49院の一つと伝えられ、古くは地名に依って兵庫寺と称した³⁰。利生護国寺の所在する橋本は、伊勢（大和）街道と南高野街道との交差する地で、紀ノ川水運でも栄えた交通上の要衝の地であった点も注目される。

まず、注目すべきは、利生護国寺が行基ゆかりの寺院であった点である。叡尊は強烈的な聖徳太子信仰、行基信仰を有し、聖徳太子や行基ゆかりの寺院を中興していった³¹。叡尊が利生護国寺中興を目指したのも、行基ゆかりの寺院であったからであろう。利生護国寺は古代寺院として栄えた時期もあったのであろうが、叡尊教団の中興以前には衰退していたのであろう。

利生護国寺は永享8（1436）年の「永享末寺帳」にも、「大慈院分」³²として記載されており、15世紀前半においても西大寺直末寺で、江戸時代においてもそうであった。現在も西大寺末寺の真言律宗寺院で、中世史料も伝来している。いわば、紀伊国における律寺化の過程を具体的に知ることができる貴重なケースといえる。

それゆえ、先学も注目し、利生護国寺の律寺化と関東祈祷寺指定などは守護北条氏（とりわけ忍性と協力関係にあった北条重時流）と北条氏被官で隅田荘地頭代隅田氏と叡尊教団との連携によることを指摘している³³。

しかし、叡尊教団側からの復興の働きについては具体的には論じられていない。そこで、叡尊教団側に注目して利生護国寺と妙楽寺の律寺化をみておこう。

先述した文永6（1269）年10月の紀伊国への叡尊下向は、日前宮神主妙蓮（紀国造紀宣親）の招請であった。

ところが、史料(8)のように、建治3（1277）年10月4日には、叡尊は隅田氏の招きで隅田荘に下向している。

史料(8)³⁴

（建治）

同三年_丑七十七歳

（中略）十月四日、於紀伊国伊都隅田庄慈光寺、二百四十人授菩薩戒、（後略）、

史料(8)は、「学正記」建治3（1277）年10月4日条である。それによれば、叡尊は10月4日に紀伊国隅田庄慈光寺を訪問し、240人に菩薩戒を授けている。この隅田慈光寺は、現在も隅田にある時光寺（隅田町、高野山真言宗）のことと考えられている³⁵。そこは、河内・大和・紀伊のまさに境界地であった点も注目しておこう。また、この隅田への下向は隅田氏による招きと考えられている。

この頃の叡尊は高齢となっていたが、数多くの弟子を有しており、弟子たちを各地に派遣し、布教活動をさせていた。それゆえ、慈光寺は西大寺直末寺を記載する「明德末寺帳」にはないが、

建治3（1277）年に叡尊が授戒のために立ち寄った頃には、西大寺系の律僧の寺院化していたのかも知れない。

史料(9)³⁶

(弘安)
同五年_{壬午}八十二歳

（中略）十月六日，紀州下向進発，著最福寺，七日，著隅田，八日，著相賀，九日，著粉河寺，（後略）

史料(9)は、「学正記」弘安5（1282）年条である。それによれば、叡尊は10月6日に紀伊国訪問を行い、10月7日には隅田を、再度、訪問している。その頃までには、隅田利生護国寺、相賀妙楽寺の中興が開始されていたのであろう。

利生護国寺の中興を中心に担ったのは浄賢房隆賢である。江戸時代の『利生護国寺縁起』³⁷によれば、「中興住僧，名曰隆賢，為興正菩薩法弟，以故隸西大寺，以為本寺長老」³⁸とある。すなわち、隆賢は叡尊の直弟子で、中興された利生護国寺を西大寺直末寺とし、その長老となった。

弘安3（1280）年に記載された叡尊から菩薩戒を授かった直弟子の名簿である「授菩薩戒弟子交名」には、「紀伊国人 隆賢 浄賢房」³⁹と見える。つまり、房名は浄賢であった。注目されるのは、浄賢房隆賢が紀伊国出身であったことで、それもあって利生護国寺の中興を任されたのだらう。

叡尊教団による地方寺院の中興に際しては、地縁がある直弟子を中心人物として派遣して中興させる事例は多かったと推測される。この利生護国寺の場合もその事例で、河内泉福寺の場合もそうであった⁴⁰。

浄賢房隆賢は、弘安3（1280）年の「西大寺西僧坊造営同心合力奉加帳」⁴¹には西大寺僧として10貫文を寄付したと記載されており、その当時は西大寺にいたのであろう。

『律苑僧宝伝』には、史料(10)のように記されている。

史料(10)⁴²

興道浄賢観心道禅四律師伝

興道律師。諱玄基。浄賢律師諱隆賢。観心律師。諱禅海。道禅律師。諱良賢。皆出_レ興正菩薩之門_一。逮_レ受_レ具戒_一。鋭_レ志習_レ学。博究_レ律教_一。後道住_レ大安寺_一。賢據_レ大慈院_一。心主_レ薬師院_一。禅居_レ大乘院_一。各樹_レ律幢_一。黑白尊崇云。

すなわち、それには浄賢房隆賢は西大寺大慈院を拠点として活動したとあるが、他の史料⁴³もそうである。利生護国寺の復興成功後は、西大寺にもどり大慈院を拠点に活動した。叡尊の「西大寺興正菩薩御入滅之記」には浄賢房隆賢は、叡尊を看病し、最後を看取った有力な弟子の一人として出てくる⁴⁴。また、叡尊没後、臨時的に叡尊教団の総責任者を勤めた⁴⁵。叡尊教団をまとめる役をも担っていたのである。利生護国寺が、西大寺光明真言会にいて、大慈院に宿泊するの

も、利生護国寺の中興者であった浄賢房隆賢が大慈院の院主となったことによるのであろう。

史料(11)⁴⁶

○當寺第二長老慈真和尚

(中略)

融圓房 東勝寺

浄賢房 當寺住

(中略)

○示観房 招提寺長老

理心房 當寺住

「光明真言過去帳」によれば、史料(11)のように、浄賢房は正和5(1316)年1月26日に死去した西大寺第2代長老慈真⁴⁷と元亨元(1321)年9月5日に死去した招提寺長老示観房⁴⁸との間に記されている。それゆえ、浄賢房隆賢は、その間に死去したのであろう。

先述のごとく、浄賢房隆賢は、弘安3年までは西大寺にいた。弘安5(1282)年に叡尊が隅田に来た時に利生護国寺に随従したのかも知れない。

利生護国寺の敷地が寄付されたのは、弘安8(1285)年であった。その年10月3日付で隅田氏の願心から「利生護国寺三宝料」として隅田北荘内兵庫芝荒野が利生護国寺に寄付されている⁴⁹。史料(12)の弘安9(1286)年4月27日付の「藤原業能・藤原泰能連署注進状」によれば、その4至(範囲)は東は湯屋谷(現在の釜谷川)から南は大和街道、西は白井谷(白猪谷)、北は御山際(大寺山)までで、約35町(ほぼ現在の下兵庫にあたる)もの広大なものであった⁵⁰。とりわけ大和(伊勢)街道に面している点に注目しよう。

史料(12)⁵¹

(端裏書)「利生護国寺敷地四至案 木支証之写也、」

紀伊国隅田庄利生護国寺敷地兵庫芝荒野事

四至〈除公田畠定〉

東限湯屋谷 南限大道

西限白井谷 北限御山際

右、注進如件、

弘安九年四月廿七日

左衛門尉藤原業能在判

左衛門尉藤原泰能在判

その後も願心による寺領の寄付は続いた。

史料13⁵²

(前略)

充行 処分事 小嶋分福王丸分

在紀伊国伊都郡隅田庄之内

合

一 是真名之内

(中略)

一 恒末名之内河北

(付箋)「此二段ハ為忌日田施入利生護国寺,」

参段小森下 式段〈迫, 此ハ寄進念仏田畢,〉

(中略)

右, 件田島・山地・荒野・所従等者, 願心相伝領掌之者也, 而限永代, 譲与福王丸畢, 後日全不可有他妨, 但於有限所当公事者, 付本名, 任先例, 可致其沙汰, 仍為後代龜鏡, 証文之状如件,

正安元年_亥十二月廿三日 願心

充行 処分事 妙楽寺開山願心之むすめ尼生信房分

在紀伊国伊都郡隅田庄之内

合

一 是真名之内肆段大

(中略)

一 下人分

弥次郎 藤七 五藤次入道 次郎太郎 備後尼

梅替女 小松女 石童

右, 件田島・山畑等者, 願心相伝領掌之者也, 而依為後家譲与尼生信房畢, 無他妨可令領知之, 但下人之内五藤次入道ハ, 生信房一期之後者, 可付正丸之方, 藤七ハ可付妙楽寺, 自余之下人□, 任生信房之意, 可被譲与何人者也, 又於有限所当公事者, 付本名, 任先例, 可致其沙汰, 仍為後代龜鏡, 証文之状如件,

正安元年_亥十二月廿三日 願心

(中略)

施入 利生護国寺忌日料田事

在紀伊国伊都郡隅田北庄之内

合

一 伍段〈峯丸名之内 字上瀬池尻〉

右、件田地者、願心相伝領掌之地也、而為後生菩提、擬願心没後之忌日料田、兼所施入之也、仍願心一期之間者、知行之、一期之後者、無相違任施入之状、可為寺領者也、但於有限所当者、以北庄下司得分、為正丸之沙汰出之、於件五段者、永不可懸之者也、仍為後日之証文之状如件、

正安元年^日十二月廿三日 願心

施入 利生護国寺西庵室念仏料田事

在紀伊国伊都郡隅田庄之内

合

- 一 貳段〈常末西迫〉
- 一 壹段〈是任名之内巧垣戸 繩本〉
- 一 壹段〈則貞名之内茅輪〉
- 一 壹段岩門
- 一 壹段〈宗友名之内上田〉

右、件山地者、願心相伝領掌之地也、而為過去左衛門尉并証意左衛門次郎孫三郎追善、彼等処分之内、各拔取壹段、限永代、充置件念仏料田畢、於有限所当公事者、為面々之子息等之沙汰、可致其沙汰、更以不可懸件地者也、若

- 一 於筒香郷者、先年已讓照月房畢、仍寄妙楽寺尼寺畢、若於彼所在家之子孫等、致違乱之時者、任長帳之面、所之人々、可被致其沙汰者也、凡不限此郷、所寄進妙楽寺并利生護国寺、及念仏料田之田畠等、若致違乱之輩出来之時者、悉如面所書置、為所之人々沙汰、押彼名田畠及所職等、可被寄于八幡宮者也、仍為後日、所録之状如件、

正安元年^日十二月廿六日

願心判アリ、
藤原貞範在判
藤原朝貞在判
藤原門丸在判
貞宗行在判

(太字、傍点筆者、以下同ジ)

史料(13)によれば、正安1(1299)年12月にも願心によって所領が寄付されている。その目的は「後生菩提」であったり、「追善」のためであった。

とくに注目されるのは、先の「明德末寺帳」に記載されている相賀(現在、東家)の妙楽寺が見えることである。叡尊が弘安5(1282)年に相賀に立ち寄っているが、おそらく妙楽寺に来たのであろう。寺伝によれば、妙楽寺は弘仁11(820)年嵯峨天皇の勅願によって、空海が開創した。また、『紀伊続風土記』によれば創建時の寺地を寺脇大森二十六社権現の西隣とし、空海の姪の如一尼が住して尼寺となり、鎌倉期に北条時頼が再興して現在地に移したという⁵³。

ところで、注目されるのは、傍点部のように「妙楽寺開山願心之むすめ尼生信房分」と見える。つまり、妙楽寺の中興開山は願心の娘尼生信房であった。このように、妙楽寺も隅田党の一員である願心とその娘を中核として中興されたのである。それゆえ、妙楽寺は尼寺であった。

とりわけ、妙楽寺の中世縁起によれば、寛元3（1245）年に叡尊らが家原寺（堺市）で行った授戒に紀州からも多くの者が参加し、建長1（1249）年の法華寺における大比丘尼戒の授戒には「当寺衆多く預った」⁵⁴という。これは縁起であり、これから直ちにそれが事実とは言いがたい。しかし、橋本からは紀伊見峠を越えれば堺までは7里（28km位）で、堺へ行くのは、それほど困難ではない。後に、妙楽寺が鎌倉幕府の祈禱寺に指定されたのも、数多くの尼がいたからであろう。それゆえ、願心の娘生信房が、参加した可能性は高いと推測される。このように、妙楽寺のケースは、地方での叡尊教団の尼の展開を考える有力な事例といえよう。

以上のような、願心による寺領の寄付もあって、利生護国寺・妙楽寺ともに隅田氏の氏寺として発展を遂げていった。しかし、注意すべきは、利生護国寺も妙楽寺も西大寺が住持の任命権を握る西大寺直末寺となっている。いわば氏寺から西大寺直末寺への発展していったのであり、その際、隅田氏は住持の任命権を失ったはずである。さらに永仁6（1298）年には忍性の申請によって鎌倉幕府祈禱寺化している。

史料¹⁴⁵⁵

西大寺	大和招提寺	同菩提寺	天王寺薬師院	大和不退寺
同大御輪寺	同額安寺	同海竜寺	河内西琳寺	大和般若寺
同喜光寺	同大安寺	河内教興寺	大和竹林寺	山城速成就院
伊勢浄住寺	山城大乘院	伊勢弘正寺	大和最福寺	同泉福寺
同三学院	同真福寺	同総持寺	神願寺	紀伊国金剛寺
同利生護国院	撰津多田院	以上僧寺		
大和法花寺	河内道明寺	大和三ヶ院	同豊浦寺	同光台寺
同舎那院	紀伊妙楽寺	以上尼寺		
都合三十四ヶ寺				
永仁六年四月 日				
忍性菩薩				

史料¹⁵⁵⁶

可禁斷守護代并地頭御家人等於西大寺以下諸寺致監惡事，
右，任今年八月十日關東御下知之旨，可致沙汰之狀如件，
永仁六年九月九日

（北条宗方）
左近將監平朝臣

(大仏宗宣)
前上野介平朝臣

史料(14)によれば、永仁6 (1298) 年4月にはとりわけ忍性の申請によって、律寺34箇寺の鎌倉幕府祈禱寺化が認められた⁵⁷。史料(15)の六波羅施行状によれば、永仁6年9月9日には、それともない西大寺以下の寺院への守護代・地頭らの乱暴狼藉を禁止する鎌倉幕府の命令が伝達されている。その34箇寺の内に、先の金剛寺とともに、利生護国寺と尼寺妙楽寺がはいっている。当時の利生護国寺と尼寺妙楽寺の寺格がいかに高くなったかが偲ばれよう。

史料(16)⁵⁸

○中観房 桂宮院長老

(中略)

制心房 白毫寺

明信房 利生護国寺

(中略)

了願房 真福寺

長真房 西琳寺

利生護国寺は現在も西大寺末寺であるが、中世の「光明真言過去帳」には3人の僧侶の名前が見える。

まず、「光明真言過去帳」に最初に出てくる明信房に注目しよう。明信房は、徳治2 (1307) 年2月2日に死亡した⁵⁹桂宮院長老中観房と正和3 (1314) 年に死去した⁶⁰西琳寺長真房との間に明信房が記されている。それゆえ、明信房は徳治2 (1307) 年から正和3 (1314) 年の間に死去したのであろう。

明信房は、弘安3 (1280) 年の「授菩薩戒弟子交名」には、「河内国人禅覚 明信房」⁶¹と出てくる。すなわち、諱は禅覚で、河内国の出身であった。「西大寺興正菩薩御入滅之記」によれば、明信房は浄賢房ほかとともに、叡尊を輪番で看病し、最後を看取った有力な弟子の一人である⁶²。明信房は、浄賢房隆賢を継いで、第2代長老として利生護国寺の発展に努めたのであろう。

史料(17)⁶³

○當寺第十四長老沙門堯基

(中略)

照寂房 金剛宝戒寺

舜了房 利生護国寺

(中略)

○當寺第十五長老沙門興泉

次に記載されているのは舜了房である。舜了房は応安3 (1370) 年4月4日に75歳で死去し

た⁶⁴西大寺第14代長老堯基と康暦1（1379）年6月晦日に86歳で死去した西大寺第15代長老興泉⁶⁵との間に記されている。舜了房は、その間に死去したのであろう。

史料(18)⁶⁶

○當寺第十八長老沙門深泉

素寂房 莊嚴浄土寺 戒行房 浄土寺

尊如房 利生護国寺 本如房 金剛寺

（中略）

○當寺第十九長老沙門良耀

次に記載されているのは尊如房である。尊如房は應永2（1395）年9月25日に死去した⁶⁷西大寺第18代長老深泉と応永11（1404）年2月25日に死去した⁶⁸第19代長老良耀との間に記載されている。尊如房は、その間に死去したのであろう。



ところで、利生護国寺には県指定文化財の鎌倉初期の大日如来像がある。その修理が昭和40（1965）年に行われ、台座銘から、弘和1（1381）年に住持実尊ら10名の住僧がいたこと、応永20（1413）年には住持榮秀ら7人の僧と2人の形同沙弥の住僧がいたことがわかる⁶⁹。史料(18)の尊如房は、大日如来像の銘文に見える住持実尊であろうか。

ところで、橋本市河瀬と下兵庫の境目の白井（猪）谷にある下兵庫の共同墓地には2基の大きな花崗岩製の五輪塔がある。いずれも無銘であるが、注目されるのは、室町初期のいわゆる西大寺様式の五輪塔と考えられている⁷⁰。さらに、その位置も重要で、まさに先述した境内地の西端（白井谷）にあたる。

従来、それらの五輪塔と利生護国寺との関係は全く注目されていない。ただ、地方史家の瀬崎浩孝氏が五輪塔の存在を指摘している⁷¹に過ぎない。しかし、それらは西大寺様式⁷²で、利生護国寺の敷地内にあり、高い方は台座を含めた総高は1 m71.5cmもある。それゆえ、それらは利生護国寺の住職の墓地と考えられる。叡尊教団は、各地の末寺に、そうした西大寺様式の巨大五輪塔を建立した⁷³からである。それゆえ、大きい方は開山の浄賢房隆賢、小さい方は第2代明信房のものかもしれない。先述のように、隆賢は西大寺で死去したが、開山であった利生護国寺に分骨した可能性がある。たとえば、極楽寺忍性は、ゆかりの3つの寺院（大和郡山額安寺、生駒竹林寺、鎌倉極楽寺）に分骨している⁷⁴。

そこで、以下に利生護国寺住持の墓塔と考えられる五輪塔の大きさなどを紹介する。

高い塔（西面から測定）

総高は1 m71.5cm、塔高は1 m53cm。地輪は幅53.5cm、奥行53cm、高さ35.2cm。水輪は高さ40.5cm、幅52cm。火輪は幅51.5cm、高さ34.5、軒幅12cm。風輪は幅33cm、高さ14cm。空輪は高さ27cm、幅34cm。

低い塔 (南面)

総高は1 m41cm, 塔高は1 m24cm。地輪は幅43.5cm, 奥行43cm, 高さ34.5cm。水輪は高さ44cm, 幅34.5cm。火輪は幅41.5cm, 高さ25.5cm, 軒幅8.5cm。風輪は幅26cm, 高さ13cm。空輪は高さ18.5cm, 幅22cm。

以上のように、白井谷の五輪塔は利生護国寺の住職の墓塔と考えられることを述べた。利生護国寺の北側には隅田党の一族の墓地がある。そうしたことも、利生護国寺が葬送に従事したことを示している。

ところで、「明德末寺帳」には、西大寺直末寺の僧寺が書かれている。とすれば、史料(1)のように、尼寺の妙楽寺が書かれているのはなぜであろうか。この点はなぞであるが、妙楽寺は「明德末寺帳」の極楽寺本には記載されていないのに、15世紀の注記も散見される西大寺本の方には一番最後に記載されている⁷⁵。それゆえ、西大寺本が作成された頃には尼寺から僧寺になっていたのであろう。

第2章 福林寺・岡輪寺・宝光寺・遍照光院・西福寺ほか

本章では、所在地が確認でき、史料が残存している末寺から論じる。

福林寺について

史料(1)の「明德末寺帳」によれば、第3番目に「トヨタ」の福林寺が挙がっている。すなわち、紀伊国の西大寺直末寺で第3位のランクであった。福林寺は、現、紀ノ川市豊田に所在する福琳寺の前身寺院と考えられている。現在の福琳寺は、金剛山一条院と号し、真言宗山階派の寺院である⁷⁶。宝亀元(770)年に沙門信行の創建で慈氏寺と号した。後一条院の時には勅願寺となったほどの由緒ある寺院で、中世池田庄の中心寺院であった。

この寺に関しては、上横手氏は「所在は明らかにできるものの、西大寺との所縁はわからない」⁷⁷とされる。だが、福林寺は、永享8(1436)年の「永享末寺帳」にも、「大慈院」⁷⁸分として見える。すなわち、15世紀の前半において、西大寺光明真言会に際し、大慈院に宿泊する末寺であった。また、先述のように寛永10(1633)年の末寺帳にも記載されている⁷⁹。それゆえ、その頃までは西大寺末寺であった。宝暦2(1752)年には勸修寺末となる。

ところで、福林寺の律寺化の過程などについては、ほとんど論じられていないが、見てみよう。まず、だれが中心となって、律寺化がなされたのであろうか。おそらく永乗房寂尊と考えられる。永徳2(1382)年1月、住持裕尊覚運房らの願いで太鼓が制作された。その銘に「当寺者後一条院御願寂尊上人草創也云々、正和五年成律院」⁸⁰とあり、この寂尊が中興開山で、正和5(1316)年に律寺化したと考えられる。

弘安3(1280)年の「授菩薩戒交名」に「大和国人 寂尊 永乗房」⁸¹とある永乗房のことであろう。寂尊は初期の頃からの叡尊の弟子(29番目の弟子)で、宝治1(1247)年の「金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇經奥書」など⁸²に名が見える。

史料(19)⁸³

(袖判)

定補 池田御庄福琳寺俗別当職事

右福琳寺長老顕日上人仁、件俗別当職於嚴密宛行畢、於寺領悉以可被知行者也、然庄家於非分課役公事、不可宛行寺領也、然則任先例、可令寺務執行者、早為伽藍興行公私御祈禱、所補任之状如件

建武貳年^{歲次}乙亥六月十八日政所（花押）

史料(19)は福琳寺蔵の建武2（1335）年6月18日付「福琳寺俗別当職補任状」である。それによれば「右福琳寺長老顕日上人仁、件俗別当職於嚴密宛行畢、於寺領悉以可被知行者也、然庄家於非分課役公事、不可宛行寺領也」⁸⁴とある。この「福琳寺俗別当職補任状」は池田庄（東北院領の一つで、当時は興福寺東門院が支配していた⁸⁵）政所が発給している⁸⁶。すなわち、建武2（1335）年において顕日上人が福琳寺の長老（住持）で、寺領の管理権を池田庄の政所によって認められている。

この顕日上人は、弘安3（1280）年に「西大寺現在形同沙弥」として出てくる「道意 顕日房 十七 紀伊国人」⁸⁷であろう。弘安3年には17歳の半人前の修行僧「形同沙弥」と出てくる。建武2年において72歳であったのだろう。注目されるのは顕日房道意もまた、紀伊国の出身であった点である。利生護国寺中興の中心人物の浄賢房隆賢は紀伊国出身であった。顕日房が福琳寺の住持となったのも、彼が紀伊国出身であった点が大きい要素であったのだろうか。

史料(20)⁸⁸

○本性房 極楽寺長老

(中略)

妙圓房 安楽寺

浄日房 當寺住

顕日房 磯野極楽寺

道照房 常満寺

(中略)

賢信房 飯岡寺

○印教房 極楽寺長老

顕日房道意は、史料(20)のように「光明真言過去帳」にも、建武元（1334）年11月21日付けで死去した⁸⁹極楽寺長老本性房と暦応元（1338）年5月24日付けで死去した⁹⁰極楽寺長老印教房との間に「顕日房 磯野極楽寺」と出てくる。福琳寺から大和磯野極楽寺に移動し、長老として亡くなったのであろう。

ところで、注目されるのは、池田庄内の村々に福琳寺所属の末寺が18箇寺もあった⁹¹ことである。これは近世の段階であり、最盛期中世において第3位の寺格の寺の状況が推測されよう。

岡輪寺について

岡輪寺は、「明德二年末寺帳」には第4番目に記されており、紀伊における第4位の寺格であったと考えられる。岡輪寺は、紀南にあり、叡尊教団が紀南にも及んでいた点も注目されている⁹²。

岡輪寺は、新宮市に所在する東陽山宗応寺という曹洞宗寺院と考えられている。「当寺の由緒書によると、元は丹鶴城の南麓にあり、岡輪寺と号した。熊野速玉大社の神宮寺で、天台・法相両宗の律院であった。天正年間（一五七三～九一）に堀内氏善が、伊豆最勝寺の秀山和尚を迎え、神宮寺を香林寺と改め禅寺とした。慶長六（一六〇一）浅野忠吉が丹鶴山に城を築くにあたり、香林寺を現住地に移した。同十一年三月二十七日、その嗣子出雲守が早世すると当寺に葬り法号を前雲州太守関芝宗応大居士と号し、寺号も東陽山宗応寺と改めた」⁹³。すなわち、熊野新宮の神宮寺で、天正年間（1573～91）に禅寺となったという。

叡尊教団の末寺には、大隅正八幡宮の神宮寺であった正国寺、誉田神社の神宮寺宝蓮花寺、大三輪神社の神宮寺大輪寺など、神宮寺が多い。叡尊教団は、神宮寺として葬送・勧進・清掃など穢れに関わることに従事していたのであろう。

また、由緒書の「天台・法相両宗の律院であった」というのは、以上、論じてきたように中世においては叡尊教団の律寺であったとすべきである。

慶安2（1649）年に作成された縁起⁹⁴によれば、聖徳太子草創の寺院という。この聖徳太子草創の伝承⁹⁵も叡尊教団が復興をめざした理由であろう。岡輪寺は「永享末寺帳」には見えないので、永享8（1436）年頃には衰退していたのであろう。

岡輪寺僧としては、「光明真言過去帳」に義明房と擬恵房の2名が見える。

史料(21)⁹⁶

○當寺第十六長老沙門禪譽

（中略）

教雲房 金剛寶戒寺

義明房 岡輪寺

乗如房● 靈山寺

當寺第十七長老沙門慈朝

義明房は、嘉慶2（1388）年5月5日に90歳で死去した⁹⁷西大寺第16代長老禪譽と明德2（1391）年4月9日に73歳で死去した⁹⁸西大寺第17代長老慈朝との間に見える。その間に死去したのであろう。

史料(22)⁹⁹

○ 當寺第廿二長老沙門英如

（中略）



擬恵房 岡輪寺

尊光房 當寺住

(中略)

○ 當寺第廿三長老沙門英源

擬恵房は、應永22（1415）年2月29日に死去した¹⁰⁰西大寺第22代長老英如と、應永廿六26（1419）年10月5日に死去した¹⁰¹西大寺第23代長老英源との間に見える。その間に死去したのであろう。

すなわち、岡輪寺は、前述のように「永享末寺帳」には見えないが、15世（図 聖徳太子2歳像）紀の前半までは叡尊教団の寺院として機能していたのである。

宝光寺について

宝光寺は、「明德末寺帳」の9番目に記されており、紀伊国の西大寺末寺で第9位の寺格であった。

『和歌山県の地名』¹⁰²によれば、この宝光寺は、現在は廢寺で、現、和歌山市黒岩に所在した。そこは「和歌山市東南部、海南市との境をなす旗揚山（大旗山）の中腹に位置する」。山号は揚柳山宝福院という。「紀州志略」では、心浄を草創者とする。宝光寺から松生院（和歌山市片岡町）に移された本堂の大斗の墨書銘から、本堂は永仁3（1295）年に建立されたと考えられている。

開山の心浄は、海草郡下津町地藏峰寺の本尊石造地藏菩薩背銘に、元亨3（1323）年10月24日の日付けとともに「勸進聖揚柳山沙門心浄」¹⁰³とある。揚柳山は宝光寺の山号であり、この心浄は心浄と同一人物と考えられている。

この心浄は、弘安3（1280）年の「授菩薩戒弟子交名」に「薬師院形同現住」の一人として載る「智円 心浄房」¹⁰⁴かもしれない。ただ、年齢などがわからないので、可能性を指摘しておく。

遍照光院について

遍照光院は、第10番目に記され紀伊国直末寺で第10位の寺格であった。注記から、高野山内に所在していると考えられるが、実際、現在も往生院谷に所在する。しかし、度々の火災などにより史料は少ない。

「明德末寺帳」には「応永五年八月廿五日十九代長老御時」という注記があり、それから第19代西大寺長老浄願房良耀¹⁰⁵の時である応永5（1398）年8月25日に直末寺になったことがわかる。また、「永享末寺帳」には「紀州遍照光院」が「東室四」¹⁰⁶分に記載されている。15世紀前半までは西大寺直末寺であったと考えられる。先述のように寛永10（1633）年の末寺帳には見えず、17世紀前半までには西大寺末寺から離脱していた。

さて、高野山の末寺書き上げといえる「金剛峰寺諸院家析負輯」の「遍照光院累代譜并追加」所収正応5（1292）年閏6月付「高野山遍照光院住持覚敦言上状」によれば、遍照光院の第9代院主聖信房良印のことを「大塔勸進聖良印者、於当山致無双之忠勤」¹⁰⁷と述べている。それから、遍照光院院主良印は大塔勸進聖であったことがわかる。また、その後任の覚敦も高野山町石五輪塔の勸進に携わっており¹⁰⁸、遍照光院は高野山の勸進を担う寺であったといえよう。

ところで、西大寺の直末寺ではないにせよ、応永5年以前に西大寺系の寺院であった可能性は高い。というのも、高野山の慈尊院から奥の院までの六里の間の参詣道に並べられた高野山町石五輪塔は、文永2(1265)年の遍照光院第10代院主覚敷の発願に始まり、幕府有力者安達泰盛や北条時宗らの助成で完成している¹⁰⁹。当時、北条氏と結びつきつつ、そうした石造遺物の建立を中心になって推進していたのは叡尊教団であった¹¹⁰。それゆえ、町石五輪塔の建立などの勸進活動を通じて、叡尊教団と遍照光院との結び付きができていった可能性を指摘しておく。

西福寺について

西福寺は「明德末寺帳」には第5番目に記されており、紀伊国内西大寺直末寺で第5位の寺格であった。西福寺の所在地ははっきりしないとされてきた。

しかし、旧伊都郡名倉村(現在の高野口町)の地蔵寺には、旧西福寺に所在した西大寺様式の塔高2m10cmの五輪塔がある¹¹¹。その地輪には「正平十一年三月十五日 光明真言一結衆中」という銘文がある¹¹²。すなわち、正平11(1356)年3月15日に光明真言一結衆によって立てられた五輪塔である。

その大きさは以下の通りである。地輪幅72.5cm、奥行73.5cm、高さ49cm。水輪は、幅78cm、高さ56.5cm。火輪は幅70.5cm、高さ44cm、軒幅15cm。風輪は幅46.5cm、高さ21cm。空輪は幅40cm、高さ36cm。

光明真言は密教で重視された真言であり、西福寺が真言系の寺院であったと推測される。とりわけ、戒律と密教を重視した叡尊教団が、そうした五輪塔の建立主体であったことを考え合わせると、この西福寺こそは西大寺直末寺の西福寺であろう。すなわち、西福寺は、名倉村に所在したと考えられる。



史料(1)の「明德末寺帳」には「破壊跡残了」と注記があるように、早い時期に衰退していたようである。ただし、「永享末寺帳」には「紀州西福寺」が「一室分」¹¹³とあり、15世紀前半までは機能していたと考えられる。

この高野口の西福寺が西大寺末寺だとすると、高野山の政所慈尊院と紀ノ川をはさんで対岸に位置する。紀ノ川の管理に関わっていた点が推測される。

その他の末寺について

観音寺は第6番目に記載され、第6位の寺格であった。所在地など不明である¹¹⁴。

光明院は第7番目に記載され、第7位の寺格であった。所在地は不明である。「永享末寺帳」には「紀州光明院」が「東室三」¹¹⁵分に記載されており、15世紀前半までは機能していたと考えられる¹¹⁶。

宝金剛寺は、所在地は不明である。宝金剛寺は、永享8(1436)年の「永享末寺帳」に「東室二分」の寺として見え、15世紀前半までは機能していた。

史料²³¹¹⁷

○當寺第七長老沙門信昭

律意房	釈迦寺	專戒房	桂宮院
觀輪房	如意輪寺	善性房	當寺住
法光房	妙樂寺	如蓮房	明星寺
真願房	安養寺	深長房	寶金剛寺

(中略)

○當寺第八長老沙門元燿

寶金剛寺の僧侶としては、史料²³のように、深長房が「光明真言過去帳」に文和1（1352）年3月2日に86歳で死去した¹¹⁸西大寺第7代長老信昭と文和4（1355）年10月17日に76歳で死去した¹¹⁹西大寺第8長老元燿との間に出ている。深長房は、その間に死去したのだろう。

律寺の機能（交通路の支配・勸進活動・葬送活動）

叡尊教団は鎌倉末には、日本全国の多くの地点で、港湾・道路・河川の管理を任されていた¹²⁰。紀伊国の場合もその可能性は高い。とりわけ、利生護国寺は大和（伊勢）街道と南高野街道の交差する橋本に位置し、ことに大和（伊勢）街道に面していた。また、紀三井寺（金剛寺）は和歌浦を見下ろす位置にある。西福寺は紀ノ川のほとりに立っていた。紀伊国の場合は史料はないが、他地域の事例から判断すれば、利生護国寺による大和街道管理や紀三井寺による和歌浦、西福寺による紀ノ川の管理なども推測される¹²¹。

そこで、そうした交通路管理にも関わる「接待所」としての律寺の役割についても見ておこう。紀伊歎喜寺（有田郡有田川町）はもと蓮光寺といい、大宮局が後鳥羽上皇の菩提を弔うために建立した寺で、洛中に所在した。のちに、現在地に移転した。歎喜寺は、現在は臨済宗妙心寺派の寺院であるが、嘉元3（1305）年から元徳2（1330）年までの30年弱は、西大寺直末寺の一つである大和菩提寺（橘寺）の末寺であった。すなわち、叡尊教団の律寺であった。歎喜寺には多数の古文書が残存しているが、それによれば、歎喜寺は熊野街道の近辺にあり、街道を通る禅律僧尼の接待所であった¹²²という。

史料²⁴¹²³

奉寄進歎喜寺接待料紀伊国和佐庄内貞国名田畠等事
合（中略）

右、当寺者、依為熊野參詣路邊、彼寺長老賢心上人多年之間為往反禪律僧尼、有接待於御輿行、且為結縁、且為現当二世、雖為欠乏之地、以件貞国名、限永代、為彼料所々奉寄進実也、随申入事由相州之処、為公私御、願尤神妙之由、所被仰出也、追可申成御教書者也、仍為末代龜鏡、寄進之状如件、

元徳二年六月一日 沙弥道珍在判

史料²⁴は、元徳2 (1330) 年6月1日付の「沙弥道珍田畠寄進状」である。その頃には無本覚心の門流賢心房 (恵甄) に歓喜寺の支配権は移動して¹²⁴いた。その傍点部から、歓喜寺の長老賢心が往還の禅律僧尼のために接待を行っていたことがわかる。それは宗教的な作善であり、道珍は一つには結縁のため、いま一つには現世・来世の菩提のために接待料所として「紀伊国和佐庄内貞国名田畠」「田壺町伍段半伍拾歩畠貳町玖段参伍百拾歩」を寄附している。

こうした旅人、とりわけ禅律僧尼を接待 (食料や宿所の提供) することは、歓喜寺に限ったものではない¹²⁵。大和街道に面する利生護国寺なども、そうした接待所の機能を有していたのかも知れない。

さらに、律僧たちは、優れた勸進能力を有していた。先述したように、海草郡下津町地藏峰寺の本尊石造地藏菩薩は宝光寺開山心浄の勸進で制作された。叡尊教団によるそうした勸進活動は紀伊国各地で行われたと考えられる。また、先述のごとく高野山遍照光院が高野山の勸進機能を担っていた点も大いに注目されよう。

このほかに、葬送活動も行っていた。利生護国寺の裏には鎌倉時代以来の隅田一族の墓がある。そうした境内墓地の存在も利生護国寺の葬送活動従事を表している。その記念碑というべきものが、下兵庫共同墓地にある2基の五輪塔や西福寺の五輪塔である。

おわりに

以上、紀伊国の叡尊教団の寺院である金剛寺 (紀三井寺)、利生護国寺、妙楽寺、宝光寺、宝金剛寺、遍照光院、西福寺、福琳寺などについて論じてきた。紀伊国の北部・中部のみならず南部の新宮の方面にも末寺は展開していた。とりわけ、大和街道沿いの交通の要衝に立地し、大和街道・紀ノ川・和歌浦の管理をしていた可能性がある。

また、紀伊国人の浄賢房隆賢による利生護国寺の中興という具合に、叡尊教団の紀伊国における展開において紀伊国出身者の活動が注目される。他の国の叡尊教団の展開においても、そうしたケースが多かったと推測される。



ところで、叡尊教団は熊野新宮の神宮寺岡輪寺を末寺化していた。史料はないが、日前宮と紀三井寺、隅田八幡宮と利生護国寺も、葬送・勸進などを通じて結びついていた可能性を指摘しておこう。

また、叡尊は1500箇寺を末寺としたという¹²⁶が、紀伊で第3位の西大寺直末寺の福琳寺の末寺が18箇寺もあったことを考えれば、その数も決して大げさとはいえないであろう。

別著¹²⁷で、叡尊教団の寺院と弥勒信仰を中核とする巨大五

輪塔（花崗岩、安山岩などの硬い石を使う）の建立について述べた。本稿においても、従来全く知られてこなかった利生護国寺の2基の五輪塔を新発見できた。調査に同行され、協力された瀬崎浩孝氏に感謝の意を表したい。

註

- 1 上横手雅敬『権力と仏教の中世史』〈法蔵館, 2009〉, オリジナルは「紀伊の律寺」『日本地名大系 和歌山県』(角川書店, 1985)の月報)202~205頁。『和歌山県史 中世』(和歌山県, 1994)。それらの他, 『和歌山県の地名』(平凡社, 1983), 『日本地名大系 和歌山県』なども参照されたい。
- 2 「明德末寺帳」〈拙著『勸進と破戒の中世史』(吉川弘文館, 1995, 2001の補訂版)〉149頁。「明德末寺帳」には極楽寺本と西大寺本があるが, ここでは西大寺本を使用している。「明德末寺帳」の史料論については拙著『勸進と破戒の中世史』を参照。
- 3 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前注(2)〉136頁。
- 4 本文で述べるように, 利生護国寺は隅田党上田氏の氏寺として出発し, 後に西大寺直末寺となった。直末寺配下の末寺としては, 大和菩提寺(橘寺)末寺の紀伊歎喜寺がある(「紀伊歎喜寺文書」『鎌倉遺文』28巻, 258頁, 21666号文書)。歎喜寺については海老沢早苗「鎌倉時代における夫婦の共同祈願—紀伊和佐庄歎喜寺(葉徳寺)の事例を中心として」(『駒沢大学禅研究所年報』13・14合併号, 2002)参照。
- 5 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前注(2)〉140頁。
- 6 寛永10年3月7日付「西大寺末寺帳」(『西大寺関係史料(一) 諸縁起・衆首交名・末寺帳』, 奈良国立文化財研究所, 1968)119頁。
- 7 『金剛仏子叡尊感身学正記』(『西大寺叡尊伝記集成』法蔵館, 1977)文永6年条。
- 8 細川涼一訳注『感身学正記』(平凡社, 1999)を314頁参照。
- 9 上横手『権力と仏教の中世史』〈前注(1)〉204頁。『和歌山市史第1巻』(和歌山市, 1991年)800頁など参照。
- 10 第2章参照。
- 11 『和歌山県の地名』〈前注(1)〉, 『日本地名大系 和歌山県』〈前注(1)〉の「紀三井寺」項参照。
- 12 「大和西大寺文書」(『鎌倉遺文』26巻)。
- 13 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前注(2)〉158頁。
- 14 寛永10年3月7日付「西大寺末寺帳」〈前注(6)〉。
- 15 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」(速水侑編『日本社会における仏と神』吉川弘文館, 2006)95頁。

- 16 「西大寺代々長老名」(『西大寺関係史料 (一) 諸縁起・衆首交名・末寺帳』, 奈良国立文化財研究所, 1968) 73頁。
- 17 「西大寺代々長老名」〈前注 (16)〉73頁。
- 18 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前注 (15)〉95頁。
- 19 「西大寺代々長老名」〈前注 (16)〉73頁。
- 20 「西大寺代々長老名」〈前注 (16)〉73頁。
- 21 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前注 (15)〉100頁。
- 22 「西大寺代々長老名」〈前注 (16)〉73頁。
- 23 「西大寺代々長老名」〈前注 (16)〉73頁。
- 24 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前注 (15)〉102頁。
- 25 「西大寺代々長老名」〈前注 (16)〉74頁。
- 26 「西大寺代々長老名」〈前注 (16)〉74頁。
- 27 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前注 (15)〉112頁。
- 28 「西大寺代々長老名」〈前注 (16)〉74頁。
- 29 「西大寺代々長老名」〈前注 (16)〉74頁。
- 30 『紀伊名所図会 三編』(臨川書店, 1996) 233~235頁。『和歌山県の地名』〈前注 (1)〉, 『日本地名大系 和歌山県』〈前注 (1)〉の「護国寺」の項参照。『橋本市遺跡調査概報21輯 利生護国寺』(橋本市教育委員会, 1988), 『橋本市遺跡調査概報21輯 利生護国寺』は利生護国寺は行基49院の寺院ではないとする。瀬崎浩孝『下兵庫村と大寺(利生護国寺)』(私家版, 2003) 参照。
- 31 追塩千尋『中世南都寺院の僧侶と寺院』(吉川弘文館, 2006) 244・245頁。
- 32 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前注 (2)〉160頁。
- 33 『和歌山県史 中世』〈前注 (1)〉, 上横手『権力と仏教の中世史』〈前注 (1)〉参照。
- 34 『感身学正記』〈前注 (8)〉建治3 (1277) 年10月4日条。
- 35 『和歌山県の地名』〈前注 (1)〉152頁。
- 36 『感身学正記』〈前注 (8)〉弘安5 (1282) 年条。
- 37 『和歌山県史 中世史料1』(和歌山県, 1975) 265頁所収21号文書。
- 38 『和歌山県史 中世史料1』〈前注 (37)〉21号文書。
- 39 拙稿「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒交名」と「近住男女交名」」(拙著『日本中世の禪と律』吉川弘文館, 2003) 70頁。
- 40 河内泉福寺を中興した戒印房源秀も河内の出身である(拙稿「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒交名」と「近住男女交名」」)〈前注 (39)〉71頁。
- 41 『西大寺叡尊伝記集成』(法蔵館, 1977) 所収「西大寺西僧房造営同心合力奉加帳一卷」383頁。
- 42 『律苑僧宝伝』(『大日本仏教全書105』名著普及会, 1979) 150頁。

- 43 「西大勅諭興正菩薩行実年譜」(『西大寺叡尊伝記集成』〈前注(7)〉) 199頁。
- 44 「西大寺興正菩薩入滅之記」(『西大寺叡尊伝記集成』〈前注(7)〉) 291頁。
- 45 「西大寺興正菩薩入滅之記」(『西大寺叡尊伝記集成』〈前注(7)〉) 298頁。
- 46 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前注(15)〉86頁。
- 47 「西大寺代々長老名」〈前注(16)〉73頁。
- 48 『招提千歳伝記』(『大日本仏教全書105』〈前注(42)〉) 25頁。
- 49 『和歌山県の地名』〈前注(1)〉の「護国寺」の項参照。
- 50 『和歌山県の地名』〈前注(1)〉の「護国寺」の項、『橋本市遺跡調査概報21輯 利生護国寺』〈前注(30)〉、瀬崎『下兵庫村と大寺(利生護国寺)』〈前注(30)〉参照。
- 51 「紀伊利生護国寺文書」(『鎌倉遺文』21巻97頁)。
- 52 「紀伊利生護国寺文書」(『鎌倉遺文』27巻70頁)。
- 53 『日本地名大系 和歌山県』〈前注(1)〉「妙楽寺」の項による。「丹生山妙楽寺薬師院縁起」『橋本市史 上巻』(橋本市役所, 1974) 参照。なお, 2012年に奈良時代後期～平安時代初期の観音像が妙楽寺で見つかっている(「橋本新聞」2012年10月9日号)。
- 54 「丹生山妙楽寺薬師院縁起」『橋本市史 上巻』476・477頁。
- 55 「紀伊利生護国寺文書」(『鎌倉遺文』26巻128頁)。
- 56 「紀伊利生護国寺文書」(『鎌倉遺文』26巻189頁)。
- 57 鎌倉幕府祈禱寺化の過程については, 湯之上隆「関東祈禱寺の展開と歴史的背景」(『人文論集』28-2, 静岡大学人文学部, 1977) 36頁など参照。
- 58 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前注(15)〉85頁。
- 59 『律苑僧宝伝』〈前注(42)〉149頁。
- 60 拙稿「河内西琳寺五輪塔と大和唐招提寺西方院五輪塔をめぐって」(『戒律文化』9号掲載予定) 参照。
- 61 拙稿「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒交名」と「近住男女交名」」〈前注(39)〉76頁。
- 62 「西大勅諭興正菩薩行実年譜」(『西大寺叡尊伝記集成』〈前注(7)〉) 196頁。
- 63 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前注(15)〉96頁。
- 64 「西大寺代々長老名」〈前注(16)〉73頁。
- 65 「西大寺代々長老名」〈前注(16)〉73頁。
- 66 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前注(15)〉100頁。
- 67 「西大寺代々長老名」〈前注(16)〉74頁。
- 68 「西大寺代々長老名」〈前注(16)〉74頁。
- 69 瀬崎『下兵庫村と大寺(利生護国寺)』〈前注(30)〉29頁参照。瀬崎『仏さまー利生護国寺の仏像から』(私家版, 2006) 5頁参照。
- 70 瀬崎『下兵庫村と大寺(利生護国寺)』〈前注(30)〉33頁参照。

- 71 瀬崎『下兵庫村と大寺（利生護国寺）』〈前注（30）〉33頁参照。
- 72 佐藤重聖「西大寺様式五輪塔の成立」（『戒律文化』4,2004）, 拙著『中世律宗と死の文化』（吉川弘文館, 2010）83頁。
- 73 拙著『中世律宗と死の文化』〈前注（72）〉83頁。
- 74 拙著『忍性』（ミネルヴァ書房, 2004）。
- 75 上横手『権力と仏教の中世史』〈前注（1）〉では「極楽寺」本を使用している。
- 76 『和歌山県の地名』〈前注（1）〉の「福琳寺」の項参照。
- 77 上横手『権力と仏教の中世史』〈前注（1）〉204頁。
- 78 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前注（2）〉160頁。
- 79 寛永10年3月7日付「西大寺末寺帳」〈前注（6）〉119頁。
- 80 『日本地名大系 和歌山県』〈前注（1）〉の「福琳寺」の項参照。史料は『考古学雑誌』60-3,1973に景山春樹, 宇野健一, 稲田和彦「近江の金石文（15）」として紹介されている。
- 81 拙稿「西大寺観尊像に納入された「授菩薩戒交名」と「近住男女交名」」〈前注（39）〉69頁。
- 82 『西大寺観尊伝記集成』〈前注（41）〉所収「金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇経奥書」383頁。また, 宝治2年将来律3大部の1, 具73巻を受けた「舜尊永乗房」も, その房名などから寂尊であろう（『西大寺観尊伝記集成』〈前注（41）〉329頁）。さらに, 建長3年にも, 遍覚三藏（玄奘）と慈恩大師基のいずれかの絵を描くかが問題となった時に遍覚三藏を描くべきとの意見を述べている（『感身学正記』〈前注（8）〉建長3（1251）年条）。
- 83 「福琳寺俗別当職補任状」（『打田町史 史料編1』打田町, 1981）385・386頁。『打田町史 史料編1』の口絵に本文書の写真あり。
- 84 『和歌山県の地名』〈前注（1）〉の「福琳寺」の項参照。『打田町史 史料編1』〈前注（83）〉385・386頁。
- 85 この点, 『打田町史 卷三 通史編』（打田町, 1983）149・150頁を参照。
- 86 『打田町史 史料編1』〈前注（83）〉385~387頁。
- 87 拙稿「西大寺観尊像に納入された「授菩薩戒交名」と「近住男女交名」」〈前注（40）〉98頁。
- 88 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前注（15）〉79頁。
- 89 「常樂記」建武元（1334）年11月21日條。
- 90 「常樂記」暦応元（1338）年5月24日條。
- 91 『打田町史 史料編2』（打田町, 1984）262頁。
- 92 『和歌山県史 中世』〈前注（1）〉273頁。
- 93 『新宮市史 史料編下巻』（新宮市, 1986）。岡本啓一「東陽山宗応寺について」（『みくまの』第1号, 1985）も参照。
- 94 宗応寺所蔵。
- 95 本文の図のように聖徳太子2歳像が寺宝としてある。

- 96 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前注(15)〉99頁。
- 97 「西大寺代々長老名」〈前注(16)〉73頁。
- 98 「西大寺代々長老名」〈前注(16)〉73頁。
- 99 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前注(15)〉103頁。
- 100 「西大寺代々長老名」〈前注(16)〉73頁。
- 101 「西大寺代々長老名」〈前注(16)〉73頁。
- 102 『和歌山県の地名』〈前注(1)〉393頁。
- 103 『下津町史 史料編・上』(下津町, 1974) 248頁。口絵には写真あり。
- 104 拙稿「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒交名」と「近住男女交名」」〈前注(40)〉99頁。
- 105 「西大寺代々長老名」〈前注(16)〉74頁。
- 106 「永享末寺帳」(拙著『勸進と破戒の中世史』)〈前注(2)〉159頁。
- 107 『続真言宗全書 34』(高野山大学出版部, 2008) 602頁。
- 108 『和歌山県史 中世』〈前注(1)〉256・257頁。愛甲昇寛『高野山町石の研究』(密教文化研究所, 1973)。
- 109 『和歌山県史 中世』〈前注(1)〉256・257頁。愛甲『高野山町石の研究』〈前注(108)〉参照。
- 110 拙著『中世律宗と死の文化』〈前注(72)〉参照。
- 111 地蔵寺には、かつて西福寺が所蔵していた文殊・普賢像などもある。
- 112 『紀伊名所図会(二)』(歴史図書社, 1970) 442頁。田中重雄「紀伊高野口町西福寺の五輪石塔」(『史迹と美術』32-4, 1962) 154頁。
- 113 「永享末寺帳」(拙著『勸進と破戒の中世史』)〈前注(2)〉155頁。
- 114 神野々観音寺には、正平7年と正平13年の2基の五輪塔が残る。それらは大念仏衆によるものだが、観音寺はそこかもしれない。今後の課題としたい。
- 115 「永享末寺帳」(拙著『勸進と破戒の中世史』)〈前注(2)〉158頁。
- 116 光明院の所在地は不明である。叡尊は粉河も訪問しており、粉河にも末寺が所在した可能性があり、光明院は粉河に所在したのかもしれない。粉河寺の十禅律院という律院には光明院があった(『紀伊続風土記』第1, 臨川書店, 1968, 704頁)。
- 117 拙稿「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」〈前注(15)〉92頁。
- 118 「西大寺代々長老名」〈前注(16)〉73頁。
- 119 「西大寺代々長老名」〈前注(16)〉73頁。
- 120 拙著『中世律宗と死の文化』〈前注(72)〉参照。
- 121 直末寺ではないが、海草郡下津町地蔵峰寺も紀南地方への入り口といえる峠に立っていた(上横手『権力と仏教の中世史』〈前注(1)〉参照)。
- 122 海老沢早苗「鎌倉時代における夫婦の共同祈願—紀伊和佐庄歆喜寺(薬徳寺)の事例を中心として」〈前注(4)〉, 追塩千尋『中世南都仏教の展開』(吉川弘文館, 2011) 参照。

- 123 「紀伊歆喜寺文書」『鎌倉遺文』40巻, 55頁, 31053号文書
- 124 海老沢早苗「鎌倉時代における夫婦の共同祈願—紀伊和佐庄歆喜寺(薬徳寺)の事例を中心として」〈前注(4)〉182頁。
- 125 伊藤正敏「歆喜寺文書中の禅律関係史料」(『和歌山市立博物館研究紀要1』, 和歌山市教育委員会, 1986) 参照。接待所の一種である旦過について、服部英雄『地名の歴史学』(角川書店, 2000) なども参照。
- 126 拙著『勸進と破戒の中世史』〈前注(1)〉131頁。
- 127 拙著『中世律宗と死の文化』〈前注(72)〉。

The Development of the Eizon Order in the Kii Province in the Middle Ages

Kenji MATSUO

This paper aims to clarify how the Eizon Order prevailed in the Kii province, present day Wakayama prefecture in Japan in the Middle Ages. At that time in the Kii province, there were 11 direct branch temples of the Saidaiji temple in Nara, which was the headquarters of the Eizon order. In the present day, except for the Gokokuji temple, they are no more of the direct branch temples of the Saidaiji temple in existence. In this paper, the author focused on how those 11 temples were restored and what role they played.